

映画「二十歳の無言館」をめぐる

菊 地 大

長野県上田市に、戦没画学生の遺作を集めた「無言館」があることをご存知の方も多いと思います。その館主・窪島誠一郎さんが、父である作家の水上勉さんとの連名の碑を岩内町の泊原発が見える丘に建てました。その時、「碑の会」というのを立ち上げて大勢の協力を得ましたが、碑の建立は予想外に難航し、3年目の2015年秋ようやく竣工しました。

「竣工の集い」を碑の近くの荒井記念美術館で行いましたが、元朝日新聞東京本社編集局長の外岡秀俊さんが、「岩内をめぐる二つのドラマ」という記念講演を行って大変好評でした。岩内町が生んだ画家木田金次郎と作家有島武郎、水上勉と窪島誠一郎、二組のそれぞれをめぐる話で、岩内という町を文化的側面から知ることができる大変いいお話でした。

その時、「碑の会」の中で、「1年に一回くらい、こんな行事ができればいいね」という話が出て、その流れの中で、昨年10月末に、若い監督によって完成した映画「二十歳の無言館」の上映を岩内と札幌で行いました。若い映画監督と窪島さんのトークショーも併せて行いました。

この催しを札幌市は後援しましたが、岩内町は、「政治的主張を行う懸念がある」という理由で拒否しました。それが北海道新聞に掲載されましたので、ぼくは、「碑の会」は反原発の活動を目的にした団体ではないこと、そういう「懸念」こそ、極めて政治的ではないか、という意見を同紙の『読者の声』に投稿し、関係者や新聞読者の皆さんに、「映画を見て判断してほしい」と訴えました。

美術館を建てたり、碑を建てたりすることは文化です。それを生み出す深く強い意志がなければできません。それは思想でしょう。文化の力強さや人を惹きつける魅力は、そこから生まれます。その強さ弱さはあっても、あるいはそれが好きか嫌いかという違いはあっても、それが正しいかどうかは、本人とそれを見る者に任されるべきことでしょう。まして、公正であるべき行政が特定の判断基準や意図をもって判断をしたり、その主催団体によって判断するというところに大きな疑問を感じました。

若い監督による映画は、無言館の絵を観た若者たちの心の交換を繋ぎ合わせたような内容で、その評価は分かりますが、ぼくは、その後、窪島誠一郎さんとのやり取りの中で、窪島さんから送られてきたファックスの「今は、(若者たちに)水をやり続けることです」という言葉が、ずっと心に残っています。